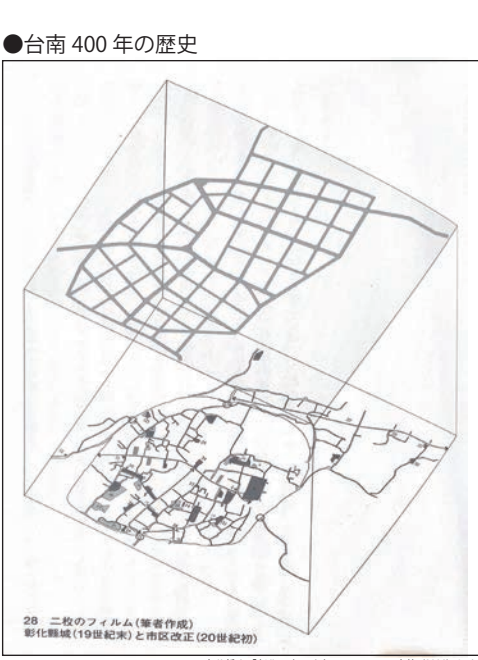


Under Construction



Urban Expansion



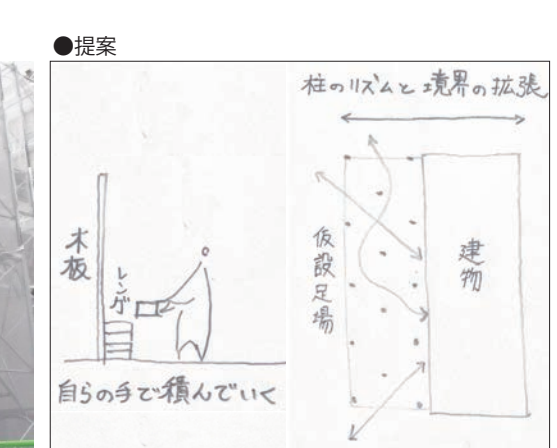
2024 年、台南はオランダ統治 1624 年から 400 年の歴史を迎え、都市には変革の後の後がまだ残る。日本統治時代にも台南では既存都市とは無関係にグリッドが引かれ、市区改正によって都市の「切断」が行われた。



台南には社会的要因による境界のない、空間的なネーバーエンディングハウスが生じている。切断面からは、失われた空間を取り戻したいという住人の都市との格闘の痕跡が読み取れた。



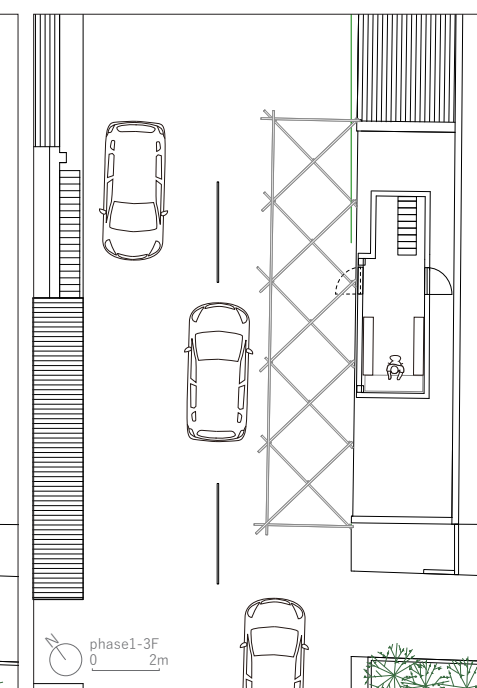
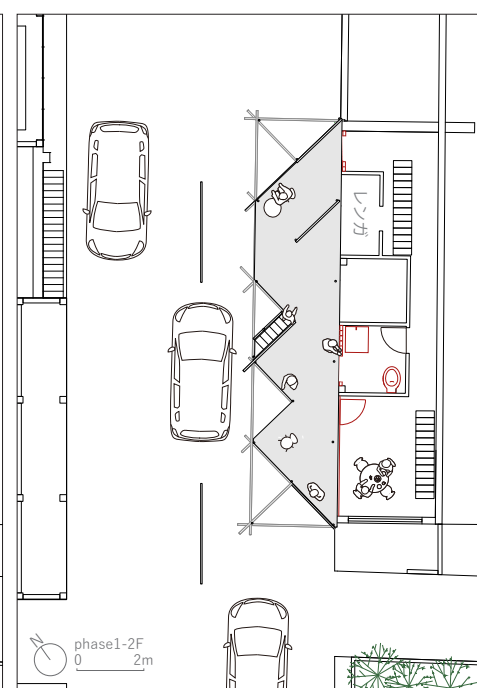
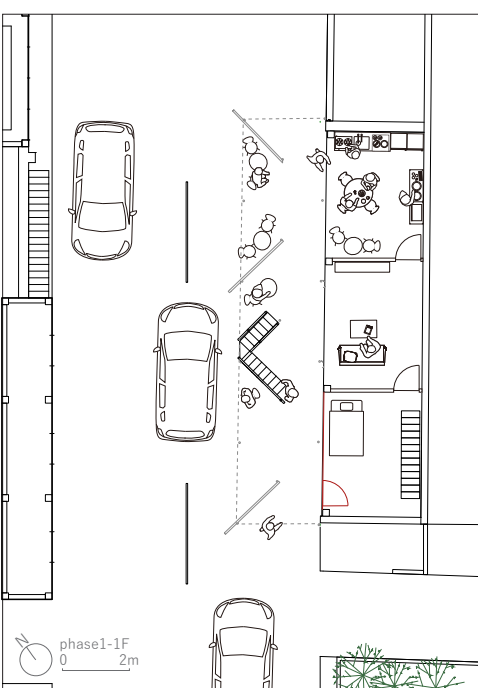
一方で台湾では工事の際、亭子脚の下も工事現場として使われ、足場により、境界が都市に対して拡張されていた。工事という仕組みとプロセスを利用することによって、都市に対して空間を住民自身が取り戻していく。



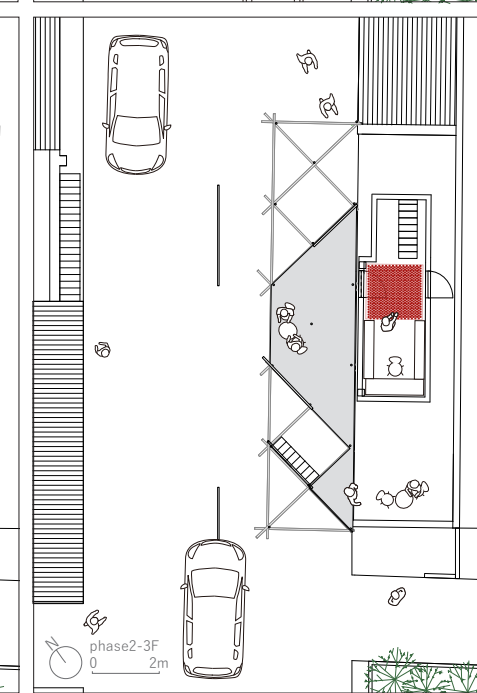
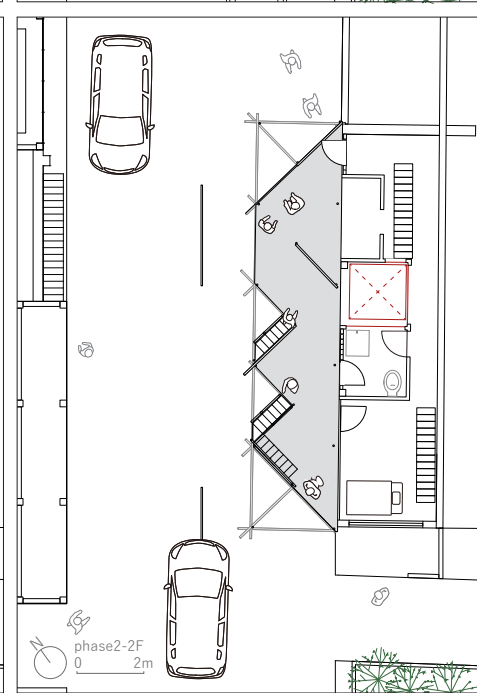
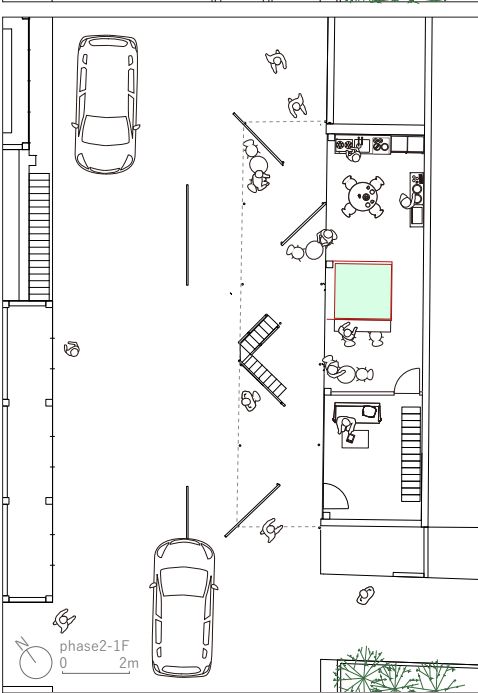
切断面に対して1日1つのレンガを積み治癒という「工事」を行う。治療行為は同時に、都市への境界拡張の契機となる。

仮設足場は 45 度斜めになったグリッド。斜材や階段などの要素により、足場の下を歩く人が自然と建築に対して向かう。

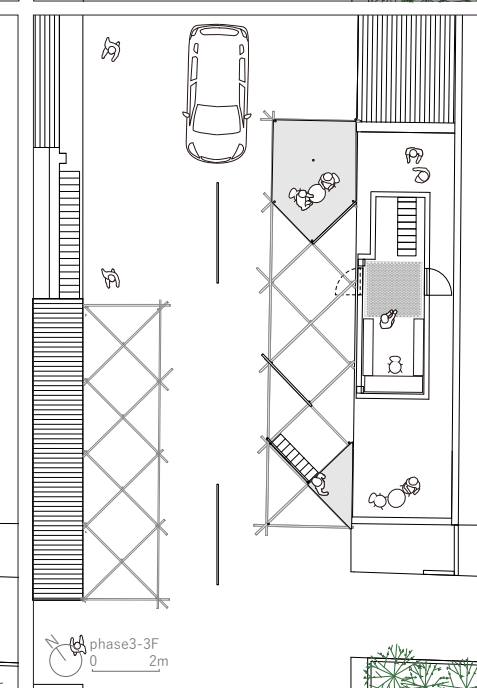
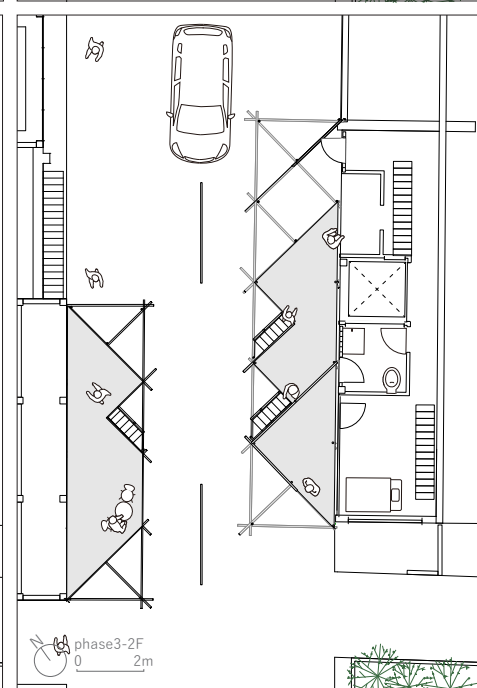
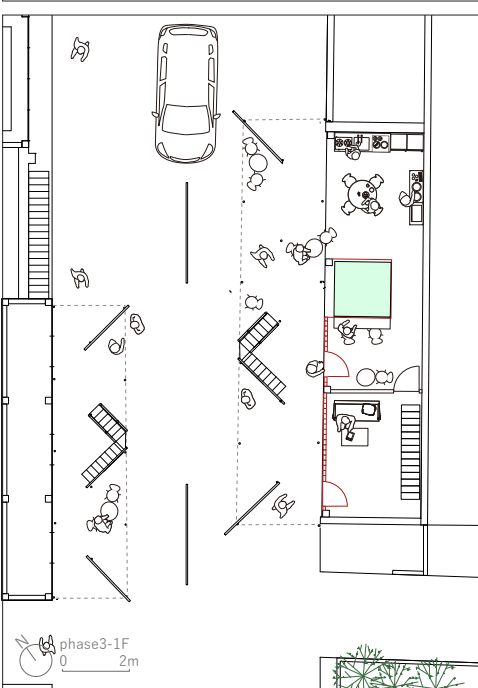
16 年間の住人自らの手による改修計画である。



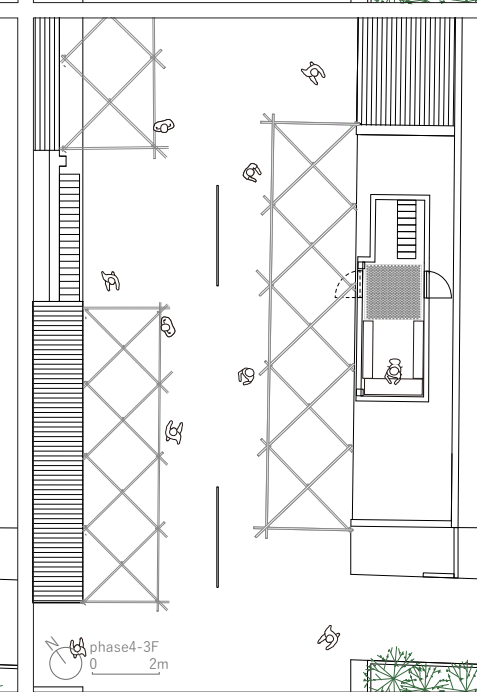
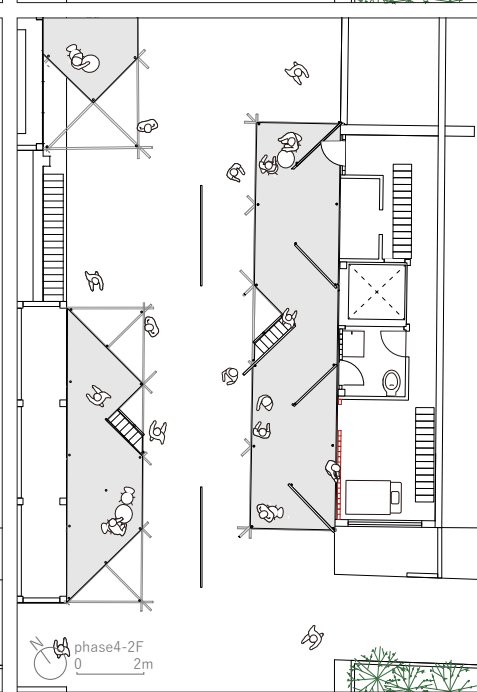
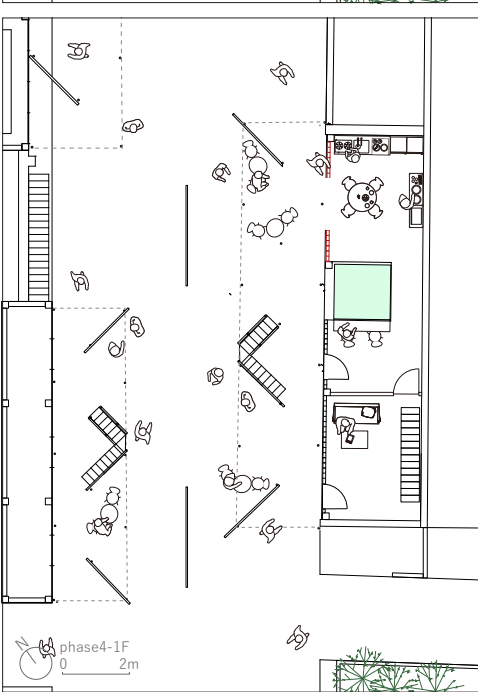
境界のない切断面を生かし、店舗と住居として使用しながら傷を癒す工事を行う。初めに住居部分には簡易的に住めるよう木板で境界をつくり、レンガを積み込んでいく。仮設足場と既存躯体の両方を活用しながら生活を行う。



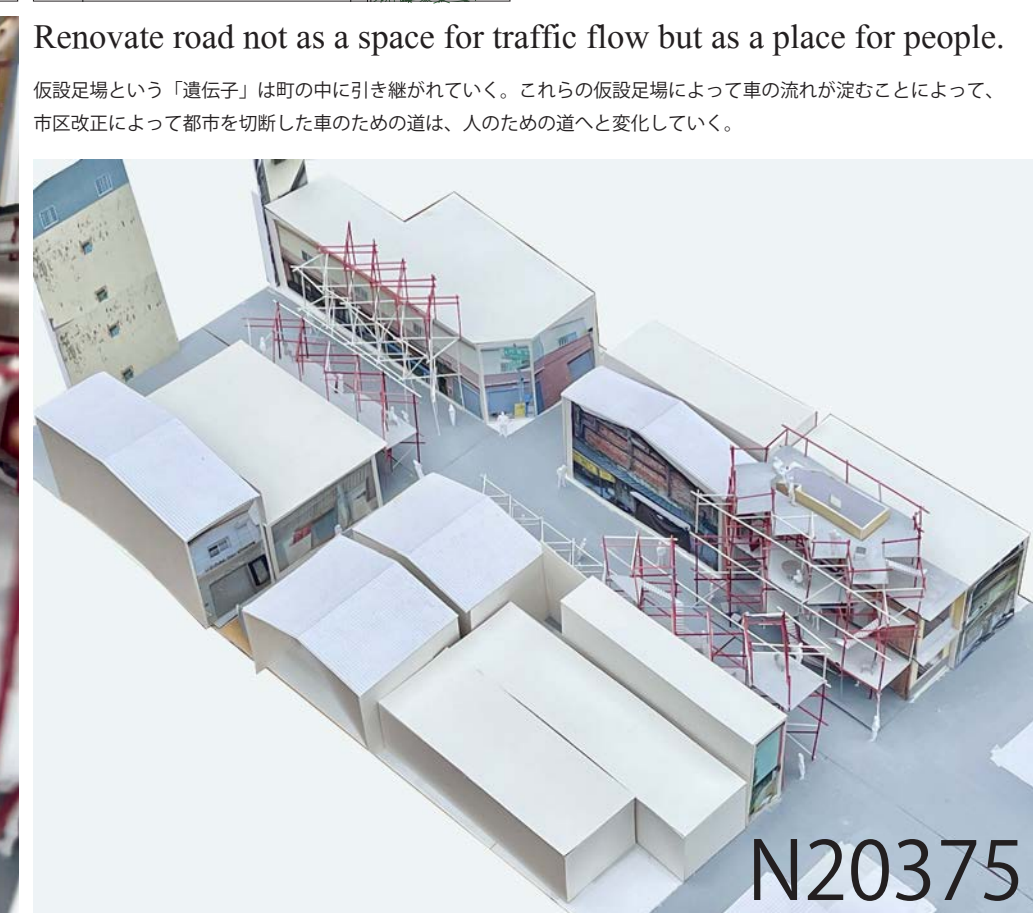
水回りのレンガを積みだのち、最上階まで足場をくみ上げ、屋根の改修と吹き抜けをつくる。多くの壁を共有し窓のない台南建築に対して、エキスパンドメタルの床から 1F にまで光が届く。



最上階の改修の後、一部の足場は撤去され、使用されながら、1F のレンガが再び積み込まれていく。このころから境界の拡張という方法を、周辺の住人も模倣し始め、町で仮設足場が見られるようになる。



残る壁を修復していくことで、対象建物の治療行為は完成する。完成した後、足場は撤去され 40 年間に渡る都市への侵攻が終わる。表面には、かさぶたのようにレンガとたくさんの開口部が残るようになる。



Renovate road not as a space for traffic flow but as a place for people.

仮設足場という「遺伝子」は町の中に引き継がれていく。これらの仮設足場によって車の流れが淀むことによって、市区改正によって都市を切断した車のための道は、人のための道へと変化していく。